

シュテファン・ゲオルゲ『魂の一年』(1)

—— 詩集の構成と冒頭の詩 ——

松 尾 博 史

松 山 大 学
言語文化研究 第39巻第2号 (抜刷)
2020年3月

Matsuyama University
Studies in Language and Literature
Vol. 39 No. 2 March 2020

シュテファン・ゲオルゲ『魂の一年』(1)

—— 詩集の構成と冒頭の詩 ——

松 尾 博 史

はじめに

本稿ではシュテファン・ゲオルゲの第三詩集『魂の一年』成立の経緯とその構成、「献辞」と「第二版序文」に記された ich と du に関する言説の問題性をまず取り上げる。さらに冒頭の詩「死を告げられし園に来て見よ」の喚起する間テクスト性の問題に触れたのち、この詩のさまざまな解釈の可能性について述べる。その解釈に際しては、ich-du の関係の重層性が問題となる。

1. 詩集の成立と構成

詩集『魂の一年』“Das Jahr der Seele”は初め Melchior Lechter 装幀による 206 部限定私家版として 1897 年に刊行され、その 1 年後、1898 年に（「1899 年再版」という発行年の記載で）公刊された。これと時を同じくして、ゲオルゲはそれまでに限定私家版として出版していた詩集を 2 冊にまとめ公刊している。この出版によりゲオルゲがそれまでの詩作の総決算を意図していたことは、1895 年 9 月末のイーダ・アウエルバッハ宛ての書簡に読み取れる。「お笑いなさいませぬ。私はふたたび転換点に立ち 全生涯を顧み それがまったく違う生に代わると感じています。これまでの生を私の本の出版で締めくくろうと思います。」彼は『讃歌・巡礼・アルガバール』を「私の歌った作品 *meine gesungenen*」, 『牧歌と頌歌・伝説と歌謡・架空庭園の書』を「私の描いた作品

meine gemalten」, 新たにまとめられた『魂の一年』を「私の語った作品 *meine gesprochenen werke*」と性格付け, それに続けてイーダへの依頼を綴っている。「ここに敬愛する友よ 一つ願いを連ねます。すでにその中のいくつかの詩篇があなたに宛てられているこの三冊目の詩集をあなたのお名前によって飾っていただけますか? (中略) あなたの好意ある了承と献詩¹⁾の閲読をお願いいたします。』²⁾ 彼女の了承³⁾にもかかわらず, 1896年11月の絶交を経て, 初版私家版は献辞なしで刊行され, 再版公刊版に添えられたのはゲオルゲの姉への献辞だった: 「アンナ・マリア・オッティリエ / 我が^{あまた}数多の道のりの / 慰め深い庇護者に」。

各詩の成立は1891年から1897年までの広い時期に渡り, いくつかの詩は「芸術草紙」に発表されている。成立時期の前半はイーダとの恋愛との関わり深い「セミラミスの歌」を含む『牧歌と頌歌・伝説と歌謡・架空庭園の書』(1895)と重なっている。ゲオルゲの詩集が, 成立したものの寄せ集めではなく, 形式意志によって構築されたものであることは, 詩集の構造に見て取れる⁴⁾。

1) この手紙には「献詩」*Widmung*と題した詩が添えられていたが, その詩は『魂の一年』の「題辞と献詩」に, 第2詩として表題なく収録されている。

2) George an Ida Auerbach, Anfang September 1895. In: George, Stefan; Coblenz, Ida: Briefwechsel. Hrsg. v. Georg Peter Landmann u. Elisabeth Höpker-Herberg. Klett-Cotta: Stuttgart 1983, S. 59.

3) Ida Auerbach an George, am 11. September 1895. A. a. O., S. 61.

4) 興味深いのは公刊版の目次である (George, Stefan: *Das Jahr der Seele*. zweite Ausgabe. Bondi: Berlin 1899, S. 127.)。この版本の *Traurige Tänze* は, ふたつの空白行によって, 3群に分けられている。第1群は *Des erntemondes ungestüme flammen* から *Mir ist kein weg zu steil zu weit* までの16詩, 第2群は *Die stürme stieben über brache flächen* から *Da vieles wankt und blasst und sinkt und splittert* までの9詩, 第3群は *Zu traurigem behuf* から *Willst du noch länger auf den kahlen böden* までの7詩である。この目次の空白行は, 1928年に刊行された全集版以降では踏襲されていない。

表題	詩群	詩篇	小計	詩節	小計	詩行	小計
刈り入れの後・雪の…	刈り入れの後	11	31	30	87	120	352
	雪の中の巡礼	10		29		120	
	夏の勝利	10		28		112	
題辞と献詩	題辞	8	34	26	79	112	365
	心楽しい集い…	10		35		125	
	この遊戯を許したまえ…	16		18		128	
悲しい舞踏	第1群	16	32	48	96	192	384
	第2群	9		27		108	
	第3群	7		21		84	

詩集全体は3部に分かれているが、各部が同じく3つの詩群に分けられている。第1部の「刈り入れの後・雪の中の巡礼・夏の勝利」は狭義の「魂の一年」を構成している。冒頭の詩“Komm in den totesagten park und schau:”を詩集全体への導入の詩として除くと、それぞれの詩群は10の詩篇によって構成されている。第2部の「題辞と献詩」は第1群の「題辞」が8つの詩篇で、第一部の各群と同じ10編の詩を取める第2群を挟んで、第3群の「この遊戯を許したまえ…」がその倍数の16の詩篇で構成されている。第2部の詩行を合計すると365行、一年の日数と一致するのは偶然だろうか。第3部「悲しい舞踏」は第1群が16詩篇、第2群と第3群を合計すると同じく16詩篇となる。全体としてそれぞれ30数篇の詩篇と350~380程度の詩行により、ほぼ均衡した三部構成となっている。

2. 第二版序文

1898年の公刊版からは献辞の次に「第二版序文」が付されている。

Auch einige die sich dem sinn des verfassers genähert haben meinten es helfe zum tieferen verständnis wenn sie im Jahr der Seele bestimmte personen und örter ausfindig machten· möge man doch (wie ohne widerrede bei darstellenden werken) auch bei einer dichtung ver-meiden sich unweise an das menschliche oder landschaft-liche urbild zu kehren: es hat durch die kunst solche um-förmung erfahren dass es dem schöpfer selber unbedeu-tend wurde und ein wissen-darum für jeden andren eher verwirrt als löst. Namen gelten nur da wo sie als huldigung oder gabe verewigen sollen und selten sind sosehr wie in diesem buch ich und du die selbe seele.

筆者の思いに近い幾人かすら魂の一年に特定の人物や場所を見出せればより深い理解の援けになると考えた。しかし(叙事文学では異論がないように)詩においても愚かにも人ないし風景の原像に戻るのを避けることが望ましい。原像は芸術によって変形を受け作者自身にとっても重要ではなくなり知識はそれゆえ他の者にとっては解明より混迷をもたらす。名が有効なのは表敬ないし贈物として永遠化するべきときに限られる。そしてこの本においてほど我と汝が同じ魂であることは稀である。

「筆者」Verfasserは読者が詩集を開く前に警告を行い、人称の解釈を一つの読み方に固定しようとする。「人物、場所、事情の正確なアイデンティファイを行うことに対する第二版序文での警告は、どれだけ真剣にとっても取りすぎることはない。正確に規定することのできる“Ich”と相手としての“Du”のインターパーソナル的配置を構造づけることにも拒否が宣告されている。その先ではこう書かれているからだ『…そしてこの書においてほど ich と du が同じ魂であることは稀である』⁵⁾「この扉を開けてはならぬ」という禁止は、「この扉を開けよ」という命令の反語法である。「原像」詮索の禁止は当然その逆の効果を生み、読者はつねにその「原像」を求めつつ詩を読まざるを得ないよう

5) Michels, Gerd: Lyrischer Herbst. Zu Stefan George »Komm in den totesagten park und schau :«. In: ders.: Textanalyse und Textverstehen. (UTB1044) Quelle u. Meyer: Heidelberg 1981, S. 51f.

に仕向けられる。無難なことこの上ない姉の名によって上書き・抹消され、禁じられた名を空白の中心として、その求心力の呪縛のなかで読者はこの詩集を読むことを強いられる。やがて I. C. のイニシャルは、ゲオルゲが校訂した決定版全集 (1928) の「付録」Anhang のなかで、さりげなさを装い「芸術草紙」発表時の3つの詩の原題名として再び言及される⁶⁾。ゲオルゲの監修のもとで書かれた詩集解説書 (1934) で、Morwitz はわざわざそのことに言及し、付け加える。「この若き日の同伴者 eine Jugendgefährtin とともに詩人は、あまりにも慣れ親しんだものへの青年期の反発のせいで数年間遠ざかっていたライン川沿いの故郷を、ふたたび享受する。」ほのめかしはやがて、ゲオルゲの死後、Boehringer の評伝や Morwitz の解説書改訂版において数々の証言として明らかにされる。「筆者」はこの序文で、そのような読みの方向性を、死後に至るまで決定づけたのである。

同じことが ich と du の捉え方を規定した文末の一節についても言える。「我と汝が同じ魂」「ich und du die selbe seele」とはいったいどういうことなのだろうか。一般的に解釈すれば、「我と汝が同じ魂」であるならば、du は ich が内面に対峙する自我の鏡像ないし投影となり、両者の語りは限りなくモノローグに近いものとなる。あるいは逆に、対峙する外在的な du を ich があくまでも同じ魂と見なすならば、du は他者性を剝奪ないし拒否されていることになる。実際どのような関係性において、この詩集で ich と du は現れているのか、読者はその点に注目しつつこの詩集を読み解くよう、この文末の一節によって読みを操作される。しかしふたたび、この規定は逆の効果をもたらすかもしれない。すなわち「我と汝が同じ魂」という決めつけは、逆に「我と汝がまったく

6) George, Stefan: Das Jahr der Seele. Gesamtausgabe der Werke. Endgültige Fassung. Bondi: Berlin 1928, S. (124.) 「題辭と献詩」に収められた詩群“ERINNERUNGEN AN EINIGE ABENDE INNERER GESELLIGKEIT”の詩「帰還」Rückkehrは“An Ida Coblenz zum gedächtnis an einige abende innerer geselligkeit”と題して彼女に贈られ (1893), その後「芸術草紙」第2巻第3号 (1894) でも「花」Blumen と「誘拐」Entführung とともに“Drei Gedichte / I. C., Einer Freundin zur erinnerung an einige abende innerer geselligkeit”という題で発表されたが、私家版でも公刊版でも彼女の名ないしイニシャルは削られていた。

相容れない魂」であることが露見することへの恐怖がなさしめた糊塗かもしれないのである。

いずれにせよすでに禁止と規定は宣告された。読者はそれに沿い、かつ／または、抗いつつ『魂の一年』を読むことになる。

3. 冒頭の詩

1. 冒頭の詩と間テキスト性

Komm in den totgesagten park und schau :	死を告げられし園に来て 見よ :
Der schimmer ferner lächelnder gestade·	速く微笑む渚のほのかな光·
Der reinen wolken unverhofftes blau	澄んだ雲の思いがけぬ青が
Erhellte die weiher und die bunten pfade.	池と色とりどりの小径を照らす。
Dort nimm das tiefe gelb· das weiche grau	そこで深い黄· やわらかな灰色を摘め
Von birken und von buchs· der wind ist lau·	白樺と黄楊の· 風はぬるく·
Die späten rosen welkten noch nicht ganz·	遅咲きの薔薇はまだ枯れきってはいない·
Erlese küsse sie und flicht den kranz·	選び 口づけし 花冠を編め·
Vergiss auch diese letzten astern nicht·	この最後の紫苑も忘れぬよう·
Den purpur um die ranken wilder reben	野葡萄の蔓のまわりの緋色と
Und auch was übrig blieb von grünem leben	緑なすいのちの名残りを
Verwinde leicht im herbstlichen gesicht.	そっと振り合わせよ 秋の面輪のなか。

ゲオルゲにかなり批判的な解釈者も、Paul Gerhard Klussmann を引用しつつ⁷⁾この冒頭の詩がゲオルゲのもっとも人口に膾炙した詩であることを認めている。「ゲオルゲの詩の中で1897年の連作詩『魂の一年』のあの冒頭の詩ほど持続的な効果を発揮してきたものは数少ない。この連作詩は『ゲオルゲのもっと

7) Klussmann, Paul Gerhard : Stefan George. In : Die deutsche Lyrik, Bd. 2, Hrsg. v. Benno von Wiese, Bagel : Düsseldorf 1956, S. 269.

も読まれた作品であるのみならず、そもそも近代詩でもっとも成功した詩集のひとつである。』⁸⁾ 公刊版の刊行以降、1922年に至るまで『魂の一年』は11版を数えているが、この成功は「この本がもっとも市民の抒情詩の理解に歩み寄っているからだろ」と後にゲオルゲ自身が語ったという⁹⁾

この背景を Steffen Martus は“Werkpolitik”において詳細に論じている。「ゲオルゲの他の詩集よりも『魂の一年』は1900年前後の読者公衆の趣味にむしり歩み寄っている。これほど売れた詩集はない。その理由は19世紀の抒情詩において規範^{カノン}の地位を得た、モチーフ的、テーマ的に似通った詩集を瞥見すれば明らかである。ゲオルゲはトポスの自然イメージを喚起しているのだ。」

エマニュエル・ガイベルの二つの詩「秋の歌」Herbstliederと「晩秋の落葉」Spätherbstblätternを引用して、Martusはこう結論づける。「ゲオルゲは『魂の一年』で19世紀のロマンティックな歌謡風の秋の詩における公園文学 Park-Dichtungの小道具を利用した。(中略)ブナの小道、池、薔薇と花冠、金と青。そしてまさにこの公園は〈死を告げられた〉。ガイベルは〈最後の詩人〉と見なされていた。彼が19世紀の locus autumnalisを〈もういちど〉模範的に詩としたからである。アルノー・ホルツがガイベルに寄せた追悼詩にはこうある。(中略)〈おお、今や最後の詩人が死に／彼とともに詩も死ぬ〉」。さらに、グスタフ・ファルケの詩「死んだ」Gestorben(1893)を引用してMartusはこう続ける「秋の自然と公園とともにポエジーは死に、自然の光と色には影が落ち、屋内の部屋の光にも影が差し、その窓には厚くカーテンがかけられる。この背景から初めて、ゲオルゲがいかに正確にその時代の武器庫を扱いこなし、それに対してどのような要求を自らに負わせたかが明らかになる。さらに重要なのは、無効を宣告された自然をその詩的に全権付与された自己の意のままになる道具とするために、周りの世界に〈死を宣告〉しなければなかったのはゲオルゲで

8) Michels, Gerd : A. a. O., S. 37.

9) Landmann, Georg Peter : Anhang zu : George, Stefan : Das Jahr der Seele. Sämtliche Werke in 18 Bänden. Bd. IV, Klett-Cotta : Stuttgart 1982, S. 121.

はない、ということだ。その逆に、ゲオルゲはとっくの昔に(死を宣告)された詩的風景の残滓を保存する。このことによって彼は自然主義の前衛的振舞いに對する教養市民、特にアカデミックな読者層のルサンチマンに応えたのだ。]¹⁰⁾

間テキスト性の観点からさらに重要なのは、Karoline von Günderode¹¹⁾ の韻文劇『魔術と運命』*Magie und Schicksal*¹²⁾ 第2幕の一節とこの詩の照応である。¹³⁾

Mandane

マングーネ

(...)

(…)

Komm! schmücke dich, mir dünkt es wäre Zeit,
Soll ich die Myrten dir zum Kranze flechten,
Und Rosen in dein dunkellockigt Haar?

来て! 身を飾るのです、今がその時かと存じます
銀梅花をあなたのために花冠に編みましょう、
そして薔薇を黒い巻毛に編み込みましょうか?

Ladikä

ラディケ

Ja, Myrten nimm, und junge Rosenknospen,
Vergiß auch der Orangen Blüte nicht,
Die schwer und duftig Balsamwolken hauchert,
Die mische mit der Myrten dunklem Grün ;
Vor allen lieb ich diese süße Blüte,
Ein ganzer Sommer ist in ihrem Kelch ;
Des Mittags Gluth und laue Abendlüfte,
Wollüstig Sehnen, und Befriedigung.-

ええ、銀梅花を採って、若い薔薇の蕾も
重く香り高い香油の雲を吐く
オレンジの花も忘れてはなりません
それを銀梅花の深緑に混ぜるのです ;
何よりも好きなのはこの甘い花
ひと夏の全てがその夢にこもっています
昼の灼熱と なまあたたかい夕辺の空気、
恍惚とした憧れ、そして満ちた理想が¹⁴⁾

10) Martus, Steffen : *Werkpolitik. Zur Literaturgeschichte kritischer Kommunikation vom 17. bis ins 20. Jahrhundert mit Studien zu Klopstock, Tieck, Goethe und George.* Walter de Gruyter : Berlin/ New York 2007, S. 615ff.

11) Günderode の詩をゲオルゲはヴォルフスケールと編集した「ドイツの詩」では取り上げていないが、『第七輪』の「銘板」*Tafeln* における短詩で彼女を顕彰している。

WINKEL : GRAB DER GUENDERODE

ヴィンケル : ギュンデローデの墓

Du warst die Huldin jener sagengauc :
Ihr planlos feuer mond und geisterscheine
Hast du mit dir gelöscht hier an der aue...
Ein leerer nachen treibt im nächtigen Rheine.

御身はかの伝説の地の慈女であられた :
御身はその無謀な炎と月と精神の輝きを
御身もろとも草原で消してしまわれた...
空の小舟が夜のライン川を漂う。

ヴィンケルはゲオルゲの故郷であるビンゲンからわずか7kmほど西のラインガウに位置するギュンデローデの自刃の地であり、その教区教会に彼女の墓が残る。

この一節は、魔法使いアルクメネス Alkmenes の娘ラディケと、侍女のマンガーネの室内での会話である。この場面で、ラディケは婚約者ティマンドラスから贈られた花を、明日の婚礼の準備のためマンガーネと花冠に編んでいる。ゲオルゲの冒頭の詩とギンターローデのこの一節は、語の照応が多数に上るだけではない。オレンジの花がひと夏の愛の思い出を全てその萼にこめているというギンダーローデの表現は、編まれた花冠が過ぎ去った秋の面輪となるといって、ゲオルゲの詩節と通じる。報われぬ愛という通奏低音において共通するところはあるとはいえ、三角関係のもたらす弟殺しを主筋とする運命劇『魔術と運命』はしかし、主題的には『魂の一年』とはほとんど無関係である。ただ、Martus に倣っていうなら、ゲオルゲはエピゴーネン詩のみならず、ロマン派の小詩人の韻文劇に至るまでの詩の伝統の武器庫を駆使し、そこから彼自身の声を響かせたのである。

しかしこの冒頭の詩の制作に際してゲオルゲが参照したかもしれない詩はロマン派に留まらない。

Die Eichbäume

Aus den Gärten komm' ich zu euch, ihr Söhne des Berges !

-
- 12) “Magie und Schicksal” は Studien. Hrsg. v. Carl Daub u. Friedrich Creuzer Professoren in Heidelberg. Erster Band. J. C. B. Mohr : Frankfurt a. M. ; Heidelberg 1805. で Tian という偽名で発表され、その後 1857 年に Friedrich Götz 編の “Gesammelte Dichtungen von Karoline von Günderrode.” Götz : Mannheim 1857 に再録されている。Cf. Günderrode, Karoline von : Sämtliche Werke und Ausgewählte Studien. Bd. 3, Kommentar. Hrsg. v. Walter Morgenthaler unter Mitarbeit von Karin Obermeier u. Marianne Graf. Stroemfeld ; Roter Stern : Basel ; Frankfurt a. M. 1991. S. 145ff.
- 13) この冒頭の詩と Günderrode の詩節の関係は Gerhard Schulz : Die deutsche Literatur zwischen Französischer Revoltion und Restauration. Erster Teil : 1789-1806. 2., Neubearb. Aufl. München 2000, S. 645 において指摘され、Mario Zanucchi : Interpretation von Komm in den totgesagten park und schau. In : Egyptien, Jürgen : Stefan George - Werkkommentar. Gruyter : Berlin u. a. 2017 において詳述されている。
- 14) Günderrode, Karoline von : Magie und Schicksal. In : ders : Sämtliche Werke und Ausgewählte Studien. Bd. 1, Texte. Hrsg. v. Walter Morgenthaler unter Mitarbeit von Karin Obermeier u. Marianne Graf. Stroemfeld ; Roter Stern : Basel ; Frankfurt a. M. 1990. S. 259.

Aus den Gärten, da lebt die Natur geduldig und häuslich,
 Pfliegend und wieder gepflegt mit dem fleißigen Menschen zusammen.
 Aber ihr, ihr Herrlichen! steht, wie ein Volk von Titanen
 In der zahmeren Welt und gehört nur euch und dem Himmel,
 Der euch nährt' und erzog, und der Erde, die euch geboren.
 Keiner von euch ist noch in die Schule der Menschen gegangen,
 Und ihr drängt euch fröhlich und frei, aus der kräftigen Wurzel,
 Unter einander herauf und ergreift, wie der Adler die Beute,
 Mit gewaltigem Arme den Raum, und gegen die Wolken
 Ist euch heiter und groß die sonnige Krone gerichtet.
 Eine Welt ist jeder von euch, wie die Sterne des Himmels
 Lebt ihr, jeder ein Gott, in freiem Bunde zusammen.
 Könnt' ich die Knechtschaft nur erdulden, ich neidete nimmer
 Diesen Wald und schmiegte mich gern ans gesellige Leben.
 Fesselte nur nicht mehr ans gesellige Leben das Herz mich,
 Das von Liebe nicht läßt, wie gern würd ich unter euch wohnen!

オークの樹々

庭園から私はおまえたちのもとへ来る、おまえたち山の息子よ！
 庭園から、そこでは自然は辛抱強く家庭的に生き、
 勤勉な人間とともに世話し再び世話される。
 しかしおまえたち、壮大なものたちは！人の手の入った世界で
 巨人の一族のように立ち、自らとおまえたちを養い育てた
 天空と、おまえたちを生んだ大地にのみ属する。
 おまえたちのひとりも人間の養樹園に行ったことはなく
 おまえたちは喜ばしく自由に、力強い根から
 お互いに伸び、鷲が獲物を掴むように
 強健な腕で空間を掴み、雲に向ける
 おまえたちの朗らかで巨大な陽光の樹冠を。
 おまえたちそれぞれはひとつの世界、天空の星々のように
 おまえたちは生きる、それぞれがひとつの神であり、自由な同盟でつながって。
 隷従に甘んじることができたなら、私は決してこの森を

羨やみもせず 仲間内の生活に屈したことだろう。

愛と手を切れないわが心が、仲間内の生活に私を拘束しさえしなければ、
喜んでおまえたちとともに住まおうものを！

1797年に“Die Horen”に発表されたこの詩は、多くの点でゲオルゲの冒頭の詩と対蹠的である。ゲオルゲの詩の語り手が公園へ聞き手を誘うのに対して、ヘルダーリンの詩の語り手はまさに庭園から逃れてきたことを聞き手であるオークの樹々に伝える。ゲオルゲの詩は公園の秋の風景の様々な局面を微視的にとらえ採集し、それを閉じた輪である花冠に凝縮しているのに対し、ヘルダーリンの詩は、自然が忍従し、勤勉な人に世話され、つましく生きるしかない狭隘な世界である庭園からの解放を歌う。また『魂の一年』第2チュクルス「雪の中の巡礼 Waller im Schnee」に

Weg den schritt vom brande lenkend	炎から遠ざかりつつ歩み
Greif ich in dem boot die ruder -	私は小舟の櫂を握る -
Drüben an dem strand ein bruder	向こう岸には同胞が
Winkt das frohe banner schwenkend.	悦ばしき旗を振って合図する。

とあるように、『魂の一年』が友愛で結ばれる仲間との Kreis に救いを見出すのに対して、ヘルダーリンのこの詩では、

Fesselte nur nicht mehr ans gesellige Leben das Herz mich,
Das von Liebe nicht läßt, wie gern würd ich unter euch wohnen !

愛と手を切れないわが心が、仲間内の生活に私を拘束しさえしなければ、
喜んでおまえたちとともに住まおうものを！

と、むしろ友愛の結ぶ仲間内の生活は、拘束と受け止められ、そこに留まることは隷従に甘んじることに他ならない。その狭い世界を逃れ、自由で独立した

巨人たちであるオークの樹々と自由な同盟を結ぶことへの憧憬がこの詩では謳われている。「1796年初めのこのヘクサメータ詩の成立とその理解のためには、イエナ逃亡後のシラーとの論争が中心となる。(中略) この詩は冒頭で庭園のモチーフを取り上げ、人間によって生み出された庭園の〈より飼いならされた〉世界 die “zahmere” Welt を自由で神的な自然と対置している。das lyrische Ich は文化的に制御された庭園の自然の〈家庭的なあり方〉 das häusliche Sein からいわば神聖なるものの領域へ歩み入る。オークはギリシアとゲルマンの神秘的な意味合いから選ばれた。オークの樹々はこの詩では神々に例えられる。」¹⁵⁾

モルヴィッツによるとヘルダーリンの「ディオティマをめぐるメノスの嘆き」を結ぶ詩句「そして新たに私たちの魂の一年が始まる」“Und von neuem ein Jahr unserer Seele beginnt” を、自分の詩のタイトルを『魂の一年』と付けた当時、ゲオルゲは知らなかったとされており¹⁶⁾ また筆者の知る限りこの冒頭の詩とヘルダーリンの「オークの樹々」はこれまで関連付けて論じられていない。

しかし“Aus den Gärten komm’ ich zu euch, ihr Söhne des Berges! / Aus den Gärten” と冒頭で二度繰り返される詩句では、詩の語り手である ich が庭園から逃れ出てきたことをオークに対して語りかけ、逃れた庭園への哀惜の葛藤を含みつつも、その庭園の手懐けられた自然の閉塞性を否定し、オークの自立性と大地から天空へと広がる志向性を賞揚するのに対し、“Kom in den totgesagten park und schau” では詩の語り手が du に対して、一度死の宣告を受けた公園へ来ることを命じ、天空から手元の花輪へ集約する動きを示す¹⁷⁾ この二つの詩のドイツ詩史上における配置と対称性は、ゲオルゲがヘルダーリンのこの詩の影響を受けたかどうかとは別に、注目に値し、この冒頭の詩がすでに、Kreis の親密圏への誘惑を含意するという解釈の可能性を開くと考えられる。

15) Danciu, Ida; Ennen, Jörg: Aus dem Ausstellungsplakat: “Aus den Gärten komm’ ich”. Ein Ausflug in die Welt der Gärten mit Friedrich Hölderlin. Hölderlin-Archiv in der Württembergischen Landesbibliothek. 15. bis 26. August 2018.

16) Morwitz, Ernst: Kommentar zu dem Werk Stefan Georges. Küpper: Düsseldorf u. München 2. Aufl. 1969, S. 107.

2. 冒頭の詩の分析

ヤンブス五揚格四行三節、第一節は交叉韻、第二節は対韻、第三節は抱擁韻で、第一節と第三節は男女性韻が交替するが、第二節は男性韻のみで構成されている。各詩行はアウフタクト（行頭の抑格）によって始まるが、第一節第一行のみ揚格で始まっている。ただしそれは韻律上の違和感として強くは感じられない。山口四郎は「例えば W. Kayser は、『然し jambisch な詩行中には一個処、韻律論上の要求に対して原則的に』自由な《個処、つまり強音を安んじて自由に扱える個処がある。即ち詩行頭である』と」指摘している¹⁸⁾

この冒頭の du に対する命令形“Komm”で、詩の語り手は呼びかけの相手である du を語り場である公園に誘う。語りは現在形で、物語世界内の物語言説として遂行される。しかしこの公園の *totgesagt* という形容は、語り手が他者（語り手でも聞き手でもない第三者）の言説を受容し、引用していることを示す。語りは、この他者の言説を否定し、公園の自然がまだ生の痕跡を残していることを示し、それを収集し、集約することに集中する。しかしそれを「見」、「摘み」、「編み」、「そっと捻じり合わせる」のは語り手ではない。語り手は命令形によって呼びかけの相手である du にそれらの行為を要請するのである。

「見よ schau」という第二の要請の後のコロンに続く、第二行から第四行は、他動詞 *schauen* の目的格ではなく、独立した主格による叙景文として語られる。中点「・」によって区分された第二行の「ほのかな光」*der schimmer* と第三行の「青」(*das*) *blau* を同格の主格と見なす場合、「渚」*die gestade* もまた遠い雲

17) 庭園 *Garten* と公園 *Park* の違いをここで強調する必要はないと思われる。確かに *Garten* がむしろ私的領域に属し、*Park* が公共的空間であるとしても、双方とも囲われた地 (*Garten* : ahd. *garto* = *das Umzäunte*, *Park* : *parc* < mlat. *parricus* = *Gehege*) を語源としている。Hölderlin は Schwetzingen の広大なプファルツ選帝侯庭園を尋ねた経験を“wir (waren) in den berühmten churfürstlichpfälzischen Lustgärten von Schwetzingen”と母宛ての手紙に書いている。Hölderlin, Friedrich: *An die Mutter, Reisetagebuch in Briefform*. Maulbronn: Juni 1788. Nach: Danciu, Ida; Ennen, Jörg: ebd.

18) 山口四郎『ドイツ韻律論』三修社 1980年, 104頁。

と青空の境界を示すものと解釈される。太陽の光の「ほのめき」*der schimmer*, 「雲」*die wolken*, 「池」*die weiher*, 「小径」*die pfade* と、視線は遠景から近景へと移動していく。第一行の公園が「死を宣告された」*totgesagt* と概念的に形容されるのに対して、第二行から第四行の自然は光 (*die schimmer*, *erhellen*) と色彩 (*rein*, *blau*, *bunt*) といった視覚的な形容詞や動詞によって描写される。しかも「思いがけぬ」*unverhofftes* 青という形容詞は、語り手が驚きをとまなう発見的な観察を同時的に聞き手に対して言表していることを示している。通念では秋の澄んだ青空を遮る「曇った白」*trübe weiß* であるはずの雲が、「澄んだ」*rein* 「青」*blau* と、逆転した視覚的形容詞で描写されている点に、この発見的要素は反映されている。また、他者の言説である「死を告げられた」*totgesagt* が冷たいネガティブな印象を与えるのに対して、語り手による *lächernd*, *bunt* という描写は暖かで柔らかな印象を与え、対比的な効果を生んでいる。色彩は「死」の連想させる暗色から、白や青を経て、落葉の散り敷く小径の色とりどりの明色へと変化していく。

第一節で語り手は聞き手に、公園という場への身体の移動、目による観察を促し、見えるものを記述したのに対し、第二節は近くの植物を指で採取することを求める。形容詞も「柔らかい」*weich*, 「温い」*lau* という触感的・皮膚感覚的なものとなる。「風はぬるく」*der wind ist lau* という一節は、風が樹々や花の揺らぎという視覚ではなく、肌を感じるそよぎと温もりという皮膚感覚で捉えられたことを示す。採取した植物を選り分け、口唇への接触を経て、花冠に編むことを語り手は要請する。精選と官能と加工。黄楊の深い黄 *das tiefe gelb*, 白樺のやわらかな灰色 *das weiche grau*, 遅咲きの薔薇 *die späten rosen* のくすんだ薔薇色^{ローズ}, など、複雑な陰影をとまなう色彩が重ねられ、ひとつの花冠に集約されていく。

第三節も命令法による聞き手への呼びかけで始まる。^{アスター}紫苑の紫、紅葉した野葡萄の葉の緋色、緑の名残りの全てと、色彩がさらに点描のように重ねられる。第一行末の midpoint で区切られることにより、第2行冒頭の四格目的語 *den purpur*

と第3行の was に始まる不定関係代名詞節は、第4行の命令形 *verwinde* の目的語と判断される。*verwinden* は「(苦痛・打撃に) 打ち勝つ、克服する」意味と「捻じる」のコノテーションを有する。収穫された晩秋の名残の植物を緩く振り、編まれた花冠は、秋の面輪をなす。第一節では広く遠景から空と雲、水辺と小道を辿った視線が、第二節では手の届く範囲の植物に集中し、第三節では *du* の両手のうちにある花冠に焦点化される。

この冒頭の詩は、さまざまなレベルでの解釈を許す。

第一は秋の叙景詩としてのレベルである。ホーフマンスタールの「詩についての対話」(1904)で、この冒頭の詩を朗読したガブリエルに、クレメンスは「綺麗だね、この詩は秋を呼吸している。」¹⁹⁾と即座に対応する。視覚・温感・触覚・詩句の触発する聴覚を総動員し、秋の色彩を点描する風景詩としてこの詩は完璧な美しさを誇る。このレベルでは、語り手は *du* に呼びかけ、見るべきもの、行うべきことを指示する権威的立場にある。ただし興味深いのは、この詩においては、呼びかけられる者の存在が希薄であるどころか、まったく示されないことである。*du* に対する命令形が7つも重ねられているにもかかわらず、それに対する *du* の反応についての言及は一切欠けている。少なくとも詩の言説のレベルでは、*du* の在りかたを示すものは何もない。それが命令形の向かう相手としての *du* を「聞き手」と言い難い理由である。

第二は、心情、すなわち、既に過去のものとなった恋愛の、それでもなおかつ残る想い出や、情熱の熾火を拾い集め、記念するというレベルである。「詩についての対話」でガブリエルは、「ここには秋があり、秋以上のものがある。冬があり、冬以上のものがある。これらの季節、これらの風景は、他のものの担い手にほかならない。」²⁰⁾と語る。遅咲きの薔薇は、訪れることがほとんど期待されなかった晩い愛の象徴であり、それは潰えた後もまだ枯れ切ってはい

19) Hofmannsthal, Hugo von: Das Gespräch über Gedichte. In: ders.: Gesammelte Werke in zehn Einzelbänden. Erzählungen erfundene Gespräche und Briefe Reisen. Fischer Taschenbuch Verl.: Frankfurt a. M. 1979, S. 496.

20) A. a. O., S. 497.

ない。庭園の他の植物が枯れても花を咲かせ続け、「愛と忍耐」の象徴とされる紫苑^{アスター}に、語り手はまた注意を喚起し摘み取らせる。詩で言及された様々な対象は、欧州のシンボル・象徴体系の中でさまざまに意味づけされうが、詩の成立過程におけるゲオルゲの恋愛体験が反映されている詩集、『魂の一年』の序詩として、恋愛にバイアスのかかった象徴解釈は容易に導かれる。この解釈をとる場合、語り手と、呼びかけの相手を、詩人本人と実らなかった恋愛の相手と重ね合わせて見る契機があることは否定しがたい。ゲオルゲの伝記資料においても、1895年4月のアウエルバッハ領事との結婚後、イーダとゲオルゲの関係はむしろ安定化したことが記されている。「結婚は、と彼（ゲオルゲ）は後に語った、友情に何ら断絶をもたらさなかった、彼はそれを普通のことと見なした、と。これは真実だったかもしれない。しかしきっと真実の全てではなかったろう。（中略）ひょっとするとしかし結婚は、彼ら二人のあいだにつねに懸案になっていたものを沈静化したのかもしれない。手紙はいまやより頻繁に、詳しく、率直になった。」²¹⁾すでに終わった恋愛の相手に呼びかけ、その恋愛の名残を採取し、ひとつの花冠に凝縮することを要請するのはしかし、過ぎたることとの印象を免れえないかもしれない。

冒頭の一行で生じている韻律上の「乱れ」は、このレベルの解釈にひょっとすると重みを与えることになるかもしれない。初めに言及したように、各詩行はアウフタクト（行頭の抑格）によって始まるが、第一節第一行のみ揚格で始まっている。「Komm」という命令法による強いアクセントを持つ語を冒頭に置いたため、この詩行のみが他と異なるリズムを持つことになったのである。ここには、「Komm」を冒頭に置く何らかの必然性があったことが想定される。

ゲオルゲは「韻は高く贖われる遊戯である」と述べている²²⁾その遊戯は韻

21) Landmann, Georg Peter: Zur Einführung. In: George, Stefan; Coblenz, Ida: Briefwechsel. (Anm. 2), S. 13f. イーダ自身が次のように記している。「1896年に私はゲオルゲと故郷で再会しました。私たちは多く共にあり、私たちの散策は以前よりも遠くへ広がりました。お互いに惜しげもなく与え合ったのは、別離の予感がなせる業だったのでしょうか。」
Dehmel, Ida: Der junge Stefan George. Aus meinen Erinnerungen. A. a. O., S. 83.

にとどまらず、詩の中に暗号として散りばめていることがある²³⁾ 冒頭の詩の

Komm in den totgesagten park und schau

の単語の頭文字を拾うと次のようになる

Komm in den totgesagten park und schau

k i d t g p u s

これをアナグラムとして並び替えてみると、次のように読むことも可能である。

k = c(oblentz), id(a) u(nd) g(eorge), st(efan) : p(ark/aar)

消された献辞の名は詩集冒頭の一行に秘かに記念されていたのかもしれない。

第三は、語り手による呼びかけの相手を、物語世界から超えた審級にある読者とする解釈である。詩集の冒頭において、詩人が直接読者に語りかけることは、ゲオルゲが傾倒したボードレールの詩集の序詩に見られるように、読者に

22) Blätter für die Kunst. 2. Folge, 2. Heft 1894. Aus : Einleitungen und Merksprüche der Blätter für die Kunst. Küpper : Düsseldorf u. München 1964, S. 11.

23) もっともよく知られた例は『盟約の星』Der Stern des Bundes (1914) の第二巻第19詩である。

- 1 Hier Schliesst das tor : schickt unbereite fort.
- 2 Tödlich kann lehre sein dem der nicht fasset.
- 3 Bild ton und reigen halten sie behütet
- 4 Mund nur an mund geht sie als weisung weiter
- 5 Von deren fülle keins heut reden darf..
- 6 Beim ersten schwur erfuhrt ihr wo man schweige
- 7 Ja deutlichsten verheisser wort für wort
- 8 Der welt die ihr geschaut und schauen werdet
- 9 Den hehren Ahnen soll noch scheu nicht nennen.

(Stefan George, : Sämliche Werke. Bd. 8, Klett-Cotta : Stuttgart 1993, S. 100.)

第1行の1文字目、第2行の2文字目、第3行の3文字目…とつないでいくと、Hölderlinの名が綴られる。この暗号はEdgar Salinが発見し、ゲオルゲもそれを肯定した。Cf: Morwitz, Ernst : A. a. O., S. 392.)

詩圏への参入を促すための常套手段といってもよい。語り手に促され公園という詩圏に参入した読者は、語り手の導くままに、その指し示す対象を想像し、享受し、自らの読書体験の中で詩世界を構成する。この場合、この冒頭の詩は、受容としての詩的行為の行程を示すものと解釈される。

しかしまた、この呼びかけを、自らに向けた声と見做し、duを再帰的な自己と解釈することも可能である。ゲオルゲの詩集における冒頭の詩を振り返ってみると、そのようなichとduの配置が散見される。第一詩集『讃歌』の冒頭の詩「河へ出でよ…」“Hinaus zum strom”は、再帰的な自己としてのduへの、日常を逃れ川辺に結界を設ける命令によって始まる。『架空庭園の書』の「もういちど彼の地に飛び立とう」“Wir werden noch einmal zum lande fliegen”においては、命令形のニュアンスをもつ一人称複数の“wir werden”という呼びかけにより、詩圏への旅立ちが要請される。この第四の読みの可能性に立つ場合、この冒頭の詩は、duに対する語りかけの形式をとった沈痛かつ内省的なモノローグとなる。美的感性の声であるichに導かれた虚ろなduは、その声の示すままに見、触れ、集め、選り、編み、その双の手の中に過ぎ去ったもの、失われゆくものの全てを込めた花冠を見出す。見るべきものを名指し、精選し、それを再構成することを求める声そのまま詩となる。ここで思い出されるのは『讃歌』の詩「一枚のアンジェリコ」の一節である。

Er nahm das gold von heiligen pokalen・
Zu hellem haar das reife weizenstroh・
Das rosa kindern die mit schiefer malen・
Der wäscherin am bach den indigo.

彼は聖杯から金を採った・
明るい髪のためには熟した小麦の穂
薔薇色は石板に描く子どもたちから
川辺の洗濯女たちからは藍を

卑近なまでに日常的なものから色彩を採りあげ、それを聖母子像という聖なる絵画へと昇華させる画家フラ・アンジェリコの目と手の仕事に焦点が置かれているこの詩と同じように、「死を告げられし園に来て見よ」では枯れ荒んだと思われている庭園からひとつずつ生の痕跡と色彩を見出す目と、それを採集し、

花冠に編み上げる手仕事への呼びかけが詩となっているのである。結語の「面輪」Gesicht は「詩」Gedicht の類音語として、Gedicht への直接的言及を避けながらそれを示唆する語として用いられている²⁴⁾

さらにこの声については、別の解釈の可能性が浮かんでくる。先ほど言及した第一詩集『讃歌』の冒頭の詩「河へ出でよ…」は、結界に降臨する詩神との接吻という詩的成就の瞬間 Kairos によって終わる。『伝説と歌謡の書』の冒頭の詩「徹宵祈禱」“Sporenwache”では、騎士叙任前夜の青年が、迷いを克服し、聖母に抱かれた幼子キリストの広げた手に導かれ、天使の飛び交う中、騎士団と一体化する瞬間が描かれる。このような詩神の召喚や、聖母子に導かれての結社への参入という詩集冒頭の詩を思い返すとき、「死を告げられし園に来て見よ」と告げる声は、単なる美的感性の声にどどまらず、詩神からの詩人への呼びかけと解釈することすらできるかもしれない。そう捉えるとすれば、du への命令法の重なりは、第二の解釈のレベルとは全く異なる印象を与えることとなる。

ここで言及しておかなければならないのは、以上の五つのレベルの解釈はすべてがそれぞれ互いを排除するものではなく、重層的に共存しうるということである。冒頭の詩という詩集の中でも特権的な位置をを勘考する場合、これに続く詩における ich と du または語り手と聞き手の関係から遡及して、この詩における語り手と聞き手の関係を一義的に決定することもできない。そのような未決定と重層性のなかで、読者はいわば狭義の『魂の一年』である秋・冬・^{ツィクルス}夏の連作に分け入っていくことになる²⁵⁾

24) 「ゲオルゲにとっては Gedicht と Gesicht (GW 4, 12; 6) または Lieb と Lied (そして Leib と Leid) は記号 Signifikanten の最小の移行によって相互に変換可能である (GW 3, 24, 48f. と 65)。ゲオルゲの詩はつねに、Fechner の見解をもういちど引用するが『いまだに感じる』ことのできる差異』に注意を喚起するための試作であり、ゲオルゲの詩は、その結果が実際の詩となっている『選択』Auswahl をともに観察し、現在する統語体 Syntagma において不在の連合系 Paradigma を見る読者の能力をテストする。」Martus, Steffen: Werkpolitik. Zur Literaturgeschichte kritischer Kommunikation vom 17. bis ins 20. Jahrhundert mit Studien zu Klopstock, Tieck, Goethe und George. Walter de Gruyter: Berlin/ New York 2007, S. 613.

25) 本論文は 2018 年度松山大学特別研究助成の成果の一部である。